

## エミリオ・ルッスの軌跡

柴野 均

### はじめに

エミリオ・ルッス Emilio Lussu はイタリアの20世紀の歴史を生きた伝説的な人物である。1890年に生まれて1975年に没するまで彼の生涯そのものがまさしくひとつの歴史である。彼の個人としての軌跡とイタリアの現代史はさまざまな部分で交錯し、響き合う。そしてまた、ルッスは優れた著作家である。むしろ、これほど優れた文章家が政治とのかかわりを生涯の仕事としたこと自体が非常に珍しいことのようにも思える。自身の体験を綴った著作は現代史および現代文学の古典として今でも多くの人々に読みつがれている。本稿ではルッス自身の文章と彼に関する諸研究を利用しつつ、その生涯をたどることにしよう。

### 1 サルデーニャの幼年時代

地中海のほぼ中央に位置するサルデーニャ島は、1861年のイタリア王国成立以前からサルデーニャ王国の一部を形成していたが、半島部の経済・社会の発展ぶりとはかけ離れた歴史的過程を経験していた<sup>1)</sup>。面積が約24,000km<sup>2</sup>であるのに対して人口は19世紀末で約85万人と少なく、最大の都市である県庁所在地カリアリですら15,000人の住民しかいない、牧畜と粗放な農業だけの島がサルデーニャであった<sup>2)</sup>。イタリア国内の南北格差は南部問題 *questione meridionale* というタームで捉えられるが、サルデーニャは明らかにそうした点では後進的な南部に属する地域であった。

エミリオ・ルッスは1890年12月4日サルデーニャ島南東部のアルムンジア Armungia という人口千人に満たない小さな山村で生まれた。彼はかなり裕福な地主の家の第三子（次男）であったが、無事に成長したのは彼と三歳年上の長男ペッピーノ Peppino だけであった。彼の家がどの程度裕福であったかについてのエミリオ自身の証言を見てみよう。

父方の祖父はどこへ行くにも必ず馬に乗る人だった。200メートルも離れていない村の床屋まで週に一、二回行くときでさえ必ず馬に乗った。そして、床屋の家の壁に、フィレンツェの古い宮殿に「鐘楼」があるように、ビヤクシンで作った輪を掛けたものだった<sup>3)</sup>。

この祖父は5ヘクタールから6ヘクタールという近在で一番大きなブドウ園を所有していたが、ブドウ酒を売るのは名誉にもとることと考えていた。第一次世界大戦の頃までわが家には半リットルが入る雄牛の角があった。その頃わが家を訪れる人には、この角をグラスにして午前中は白ブドウ酒、午後は赤ブドウ酒を振る舞う

のが習慣だった<sup>4)</sup>。

こうした記述やエミリオの父親ジャンニク Giannicu が1907年からアルムンジアの村長をつとめていたことなどから判断しても、ルッス家は貧しいサルデーニャの農村の中では明らかに例外的に富裕な一家であった。

エミリオはサルデーニャの豊かな森と川の自然の中で幼年時代を過ごした。父親たちから狩猟の話の聞いたり、子どもたちの遊びを通じてひとつの世界観を獲得していった。少年時代のエピソードに1900年7月29日の国王ウンベルト一世の暗殺事件がある。村役場の鐘が鳴らされ、休暇中であるにもかかわらず子どもたちに学校に集まるように指示が出された。学校では教師が話をした。モンツァで善良なる国王がアナキストの凶弾に倒れたというのである。なんたる災厄、なんたる不運、と声涙下る調子で教師は語った。子どもたちも全員が涙を流した。家に帰ったエミリオとベッピーノは父ジャンニクに泣きながらこのニュースを伝えた。父親は静かにエミリオたちに向かって次のように語った。

悲しむ必要はない。王は決して善良ではなかった。なぜなら、軍隊を派遣してアビシニア人たちを殺させたのも、ミラノでデモ行進参加者たちを殺させたのも国王だから。また、サルデーニャ人の知る王は、横暴で泥棒でしかなかったから。そして、貧者が死んだ場合には子どもたちが飢えに瀕するのに対して、国王には限りなく豊かな皇太子がいるから<sup>5)</sup>。

1889年から始まるイタリアのアフリカへの帝国主義的侵略や、1898年のミラノでの暴動の際の苛烈な弾圧の背後に当時のイタリア王国の支配層の意図があったこと、サルデーニャ島の歴史は外部の支配者による抑圧の歴史であることを父親は子どもたちに教えたのである。また、この父親を通じてエミリオは民主主義的な世界観・歴史観を受け継いでいく。ルッスの家に雇われていたアントーニオという日雇農業労働者をめぐるエピソードもある。当時10歳ほどだったエミリオは遊んで帰ってきてからアントーニオにある仕事を命じた。一日働いて疲れていたアントーニオはこれを拒否した。エミリオが「おまえは使用人で、ぼくが主人だからやれ」と言ったとたんに、そばにいた父親から平手打ちを食らった。父親はこう言った。「アントーニオが主人で、おまえが使用人だ。なぜなら、アントーニオは働いているのに、おまえは何もしていないからだ。アントーニオの働きがないと、おまえは飢え死にしてしまう。アントーニオが働かなければ、全員が飢え死にしてしまうだろう。働く者が命令するのだ。」<sup>6)</sup>

エミリオは12歳で中等学校に進学した。これはアルムンジアから馬で一日の行程にあるラヌセイという村にある、サレジオ修道会の寄宿学校だった。それまでルッス家には高等教育を受けた者が一人もおらず、ジャンニクは息子のどちらかを大学までやることを考えていた。ラヌセイで五年間の教育を受けたエミリオは続いて高等学校へ入学するが、父親が選んだ学校はローマの名門校である《テレンツィオ・マミアーニ》校だった。だが、結果は思わしくなかった。ルッス自身が次のようにローマでの生活を回想している。

ローマでわたしはよく勉強しなかった。出発する前に両親はわたしに大枚の金を払って身支度を整えてくれ、ローマでもその頃としては過分な仕送りももらっていた。それでも、恥ずかしい思いとともに告白しなくてはならない。わたしは馬鹿げた気晴らしにふけていたのだ<sup>7)</sup>。

わずか一年でローマ遊学は終わった。第一学年に落第してしまったのである。発奮したエミリオは私的に勉強して失った一学年だけでなく、あと二学年分を一挙に取り戻して、その翌年に高校卒業資格試験を受験した。しかし、結果はこれも失敗で、結局彼はキャリアの高等学校に転校した。そして1910年の資格試験に合格して大学入学の権利を獲得した。既に20歳になっていた。

## 2 第一次世界大戦の英雄

1910年11月エミリオ・ルッスはキャリアリ大学の法学部に入学した。しかし、翌11年には予備将校 *ufficiale di complemento* として兵役につき、士官養成コースへの入学も許可された。こうして1912年の末に彼は少尉に任命された。1913年8月にいったん除隊したルッスは大学に戻り、イタリアの参戦直前の1915年4月に最終試験に合格して大学を卒業した<sup>8)</sup>。

イタリアは第一次大戦が始まって10カ月後の1915年5月に戦争に加わったが、参戦決定までには中立派と参戦派の間で国論を二分する激しい対立があった。中立派は社会主義陣営、カトリック派などの他に、議会内の主流派であったジョリッティ派も消極的な中立論の立場をとっていたために、多数派を占めていた。これに対して参戦派は、イタリアの帝国主義的進出を目指しつつイタリア人の住む未回収地域の獲得を狙うナショナリストから、リソルジメントの完成を求める民主派、さらには戦争を契機とする国内の革新を求める革命的サンディカリストまで雑多なグループから形成されていた。

ルッスはキャリアリ大学の参戦派学生のリーダーだった。彼は民主主義的・リソルジメントの熱情に駆られて、この戦争を中欧の二大帝国が自由の価値を守ろうとする協商側に襲いかかったものと判断していた<sup>9)</sup>。そして彼はまさに大学から戦場に直行したのである。ルッスは新たに作られたサッサリ旅団 *Brigata Sassari* の第151連隊第三大隊に少尉として配属された。これ以後終戦にいたるまで彼は最前線での戦闘を経験することになる。

サッサリ旅団の構成員はほぼ全員がサルデーニャ出身兵であり、1915年5月の開戦と同時に動員されてイタリア北東部のオーストリアとの国境地帯であるイゾンツォ川での戦闘に加わった<sup>10)</sup>。この地域はカルソ *Carso* と呼ばれる石灰岩からなる台地であった。ここを舞台に優勢なオーストリアとハンガリーの連合軍を相手としてイタリア軍は凄絶な塹壕戦を戦った。カルソでの戦闘は、1917年10月の「カポレットの大敗」によるイタリア戦線の崩壊まで続くことになるが、イタリアにとってはまさに第一次大戦の代名詞ともなる激しいものだった。カルソでの戦闘を自ら経験した詩人ジュゼッペ・ウンガレッティ *Giuseppe Ungaretti* は、次のようにそれを表現している。

わたしはカルソのサン・ミケーレ山にいた。我が軍より遙かにすごい重装備をし

て、我が軍より高い位置を占めた敵と向かい合って、わたしは夜も泥の中に横たわり……塹壕のなか、いつも、いつも塹壕のなか、休暇も取れずにサン・ミケーレ山にへばりついてた。一年間もこうした戦いが続いたのだ<sup>11)</sup>。

また、ルッスもカルソでの戦闘をこんな風に回想している。

1916年5月末、わたしの旅団はまだカルソにとどまっていた。開戦以来わたしたちの部隊はこの戦線で戦闘を続けてきた。わたしたちにはもはや状況は耐えられないものになっていた。わずかな土地の切れはしにも、そこで行われた戦闘と戦死した仲間たちの思い出がからみついていた。わたしたちは敵の塹壕を次から次へと占領する以外のことはしなかった。「赤猫」壕のあとには「黒猫」壕、そして「緑猫」壕と征服を続けた。しかし状況はいつも同じだった。ある塹壕を征服すると、今度は別の塹壕を攻略しなければならなかった<sup>12)</sup>。

要するに、山岳地帯での陣地戦であり、それは泥まみれの塹壕での生活と果てしのない流血の繰り返しであった。そして、1916年5月にサッサリ旅団はカルソからトレンティーノ地方の戦線に配置換えを受けた。ここがルッスの著作『高原の一年 *Un anno sul Altipiano*』の舞台となったアジアーゴ高原である。現在では第一次大戦を扱った古典的な作品と評価されているこの本の中で、ルッスは戦争の悲惨さと人間の偉大さ、滑稽さを見事なまでの描写力で浮かび上がらせている。数多くあるそうした描写の中でひとつだけ次のような例をあげよう。これは戦略的に非常に重要な拠点であるモンテ・フィオールという山をイタリア軍が放棄したあとのことである。

わたしはモンテ・スピルの一番高い地点で勤務についており、モンテ・フィオールを見つめていた。オーストリア兵たちは無秩序にそこに流れ込んでいた。30分足らずでわれわれが放棄した前線を敵の一個大隊が占領した。山々の峰は敵の部隊で一杯になった。

午後6時か7時頃のことだった。敵の陣地内で普通ではない動きが発生した。何が起きたのか？ 敵の諸大隊が動きながら叫び、声を上げていた。全員がたったひとりの人間であるかのように立ち上がっていた。モンテ・フィオールの頂上から喝采の声が聞こえてきた。

「ウラー！」

オーストリア兵たちは銃や帽子をわれわれに向かって振っていた。

「ウラー！」

この大騒ぎの理由がわたしにはわからなかった。それは衝突なしに敵の陣地を占領した喜び以上のものだった。なぜあんなに大喜びをしているのか？

わたしは後ろを振り向いてその理由がわかった。

残照の中に、光り輝く真珠で覆われた巨大なマントのようなヴェネト平野が目の前に広がっていた。すぐ下にはバッサーノとブレンタ、もっと遠くの右側にはヴェ

ローナ、ヴィチエンツァ、トレヴィーゾ、パードヴァが見えた。左側にはヴェネツィアが見えた。そうだ、ヴェネツィアが見えたのだ！<sup>13)</sup>

オーストリアは1866年の普墺戦争の際に、プロイセン側について参戦したイタリアに軍事的には勝利しながら、プロイセンに敗れたためにヴェネツィアを失った。そういう背景がこの場面から見えてくる。

ルッスのこの本は英雄的な、あるいは愛国的な兵士の姿よりも、戦場の暮らしを耐えている生身の兵士たちの姿で満たされている。上官の命令に従わない将校や兵士たち、コニャックなしでは戦闘の場に立ち向かえない将校、状況の把握と正しい戦術を打ち出せない司令部など、彼が実際に見聞きしたエピソードで溢れている。これが古典的な作品と評価されているのは、まさしく戦争の現実をこれほど正確に捉えている著作が少ないせいであろう。そして、ルッスの簡潔で雄弁な文体が戦場の光景を手取るように浮かび上がらせることに成功しているためである。

さて、1915年5月のイタリア参戦から1918年11月の休戦までの期間に負傷して部隊を離れたのはわずか一回だけで、ルッスは一貫して前線の指揮官として戦い続けた。そして休戦時には彼は大尉として大隊を指揮する地位まで昇進している。彼はその間に戦功章を四回受賞しているが、それよりも重要なのは同じ旅団の将校や兵士たちが彼に対して抱いた一種の神話的なイメージである。軍事的に圧倒的に不利な局面で無謀な突撃を命令する師団長に対してルッスが抵抗したときのことである。

第三大隊の指揮官たちは全員が戦死あるいは負傷して隊を離れ、前任副官の中尉（ルッス）だけが奇跡的に命令系統を保持させていた。師団長が言った。「中尉わかったか？ 直ちに命令を遂行すると保証してくれたまえ。」  
「いいえ、できません。」将軍は目を大きく開いて彼を見つめた。ルッス中尉は気をつけの姿勢のまま上官の顔をじっと見ていたが、そこには傲慢な態度はかけらもなかった……。「できないだと！ きみは命令を遂行する意志がないのか？」  
「ありません。」  
「きみを即座に銃殺にかけるぞ！」  
「どうぞ、お願いします。」……直ちに命令を実行していた英雄が、命令を拒否することで英雄となる時もあったのだ<sup>14)</sup>。

ルッスが負傷した1918年1月の戦闘に関する同僚の日記では次のように語られている。

将校たちは兵士たちと一緒に敵の追撃に移った。ルッス大尉はいつもと同じ大胆さで自らの中隊を率いて敵の戦線を二度にわたって突破した。ルッス大尉はわずかな手勢を指揮してオーストリア兵の集団を捕虜にしたが、その際に負傷した<sup>15)</sup>。

こうした戦闘や塹壕生活を通じて、もっぱらサルデーニャ出身者で構成されているサッサリ旅団の中でルッスは次第に伝説的な存在となっていった。「ルッスこそは戦争の第一日目

から最後の日まで最前線にいて、60回にも及ぶ戦闘に参加し、数々の悲劇的な体験を経て心は老い込みながらも、第一日目の平静さと男らしい決意を保ち続けた人物であった。彼の歴史こそが旅団の歴史である<sup>16)</sup>。」

### 3 サルデーニャ行動党と反ファシズム闘争

他の交戦国と同様にイタリアにとっても第一次世界大戦は大きな犠牲を払わざるを得ない戦いとなった。動員された将校と兵士の総数は575万人、戦死者はその約1割の57万人を数え、戦傷者も50万人以上に達した<sup>17)</sup>。何よりも総力戦を戦い抜くために、統一国家の成立から半世紀しか経過していないイタリアは多くの試練をめぐり抜けなければならなかった。特に動員された兵士の大半を占める農民たちに対して、政府は戦後の改革（特に農地の解放）を約束して彼らの戦争への協力を確保しようとした。したがって、戦争の終結は激しい社会闘争の開始を意味した。

サルデーニャ島の1914年の人口は87万人で、そのうちの11.8%にあたる98,142人が動員され、戦死者・行方不明者は17,000人を数えた。これは動員数の約17%にあたり、島民総数の2%に相当した<sup>18)</sup>。全体の数字と比較して、この数字はサルデーニャ出身兵たちが激戦の地区に投入され、とりわけ大きな犠牲を払ったことを意味している。そしてサッサリ旅団では「サルデーニャ主義 sardismo」——サルデーニャ出身の兵士と将校だけで部隊を構成し、部隊内の人的結合を強める——という方針が採用された<sup>19)</sup>。戦争を通じての彼らの変化についてルッスは次のように語っている。

サルデーニャの兵士たちにとって、この共通の体験は全く新しい考え方を日々獲得することにつながった。その考え方とはまず第一に、戦争を戦っているのは農民、牧夫、労働者、職人だけであること。第二に、敵軍も（オーストリア兵、ハンガリー兵、チェコ兵、ボスニア兵であると問わず）また労働者と農民であること。第三に、本当の敵は戦争を指揮し命令している連中であること。しかし、イタリアで指揮しているのは誰か？ ……批判は政治的領域に向けられるようになった。戦争を指揮しているのは国王の政府だった。村で指揮しているのは村長・薬剤師・収税請負人・カラビニエーレといった連中が国王の政府の側についていた。彼らも敵だろうか？ そうだ全員が敵なのだ<sup>20)</sup>。

戦後最初の国政選挙は1919年11月に行われた。当時のサルデーニャの政治状況は、一方にコッコ=オルトゥ Francesco Cocco-Ortu をリーダーとする戦前からの支配勢力である名望家層があり、他方にはイグレンシアスの鉱山地帯の労働者たちを中心とした社会党勢力が存在していた。しかし、戦争はそれまでの政治的バランスを大きく変えてしまった。とりわけ重要な意味を持ったのは復員兵士たちの運動である。そしてその運動の中心となったのがルッスであった。

「赤い二年間」と呼ばれる1919～20年には激しい労働運動や左派の攻勢があり、またダヌ

ソツィオによる「フィウーメ遠征」など、左右の政治勢力による激烈な動きが続いた。その間に復員兵士たちの運動は全国レベルでは政治的な結集点を持ち得ないままに分裂していったが、サルデーニャではサルデーニャ行動党 Partito sardo d'Azione という政党の結成に成功した。サルデーニャの各地で復員兵士たちが中心となって新たな党派が生まれ始めたのは1920年春のことであった。そして翌1921年4月に結党大会が開かれた。サルデーニャ行動党にはさまざまな潮流が流れ込んでいたが、全体としてはきわめて革新的な要求が主流を占め、サルデーニャの現状を社会主義的に変革していこうとするグループが指導的な立場を獲得した。リーダー格であったルッス自身の言によれば、サルデーニャ行動党は「全く支援も報酬もないままに自らを犠牲にして戦争を戦い、その代償を身をもって支払ってきた、イタリアのプロレタリアート、農民、牧夫、小地主層を解放する<sup>21)</sup>」役割を果たす党派であった。

そして1921年5月15日の選挙でサルデーニャ行動党は島内で28.8%の投票を得て、4人の国会議員を下院に送り出した。そのうちの一人が30歳のエミリオ・ルッスであった。しかし、この選挙は「大リスト<sup>リストーネ</sup>」と呼ばれた政府側の候補者リストの中にファシストが参加した選挙であり、結果としてムッソリーニを含む37名のファシスト議員が初めて議会に登場した。下院の会期の初日に、共産党議員ミシアーノ Francesco Misiano がファシスト議員たちによって議場であるモンテチトーリオ宮殿から力づくで追い出される場面をルッスは目撃しているが、彼はその政治活動の最初からファシストとの対決を余儀なくされることになった<sup>22)</sup>。

サルデーニャの場合には、復員兵士の多数がサルデーニャ行動党に組織されたために、攻撃的な形でのファシズム運動が発展する可能性は乏しく、また社会党および労働運動もその力が限られていたために「ボルシェヴィズム」の危険を主張しながらファシズム運動を展開することも困難だった。サルデーニャの初期のファシストたちはまったくのはね上がりか、資本家の金をバックにした少数のグループであった<sup>23)</sup>。したがって、1920年後半から1922年にかけてのイタリア北中部でのファシズム運動の発展とは質量ともに非常に大きな差があった。

「ローマ進軍 Marcia su Roma」と呼ばれる、議会外の示威運動と巧みな駆け引きによってムッソリーニは1922年10月末に政権の座についた。その直後の11月4日は第一次世界大戦の戦勝記念日で、全国の主要都市で政府の主催による大集会が開かれた。ヴェネツィア、トリノ、フィレンツェ、ジェノヴァなどいずれの都市でも集会は平穏かつ成功裏に終わった。それがサルデーニャではどうであったらうか。

11月4日の祝典の準備がさかんに行われていた。新政府は軍隊と戦傷者および復員兵士たちの味方であることを示したかった。主要都市では国庫負担によって大集会が開かれた。力とコンセンサスを示すためにはまず厳粛さが必要だった。

カリアリでは祝典に2万人を越える復員兵士が参加した。

ファシストたちも黒シャツ姿でよく統制されて参加した。駐屯部隊によるパレードも行われた。全市民がそのまわりに集まった。

ファシストの隊列が足並みを揃えて復員兵士たちの前を通過していたときに、叫び声が上がった。「くたばれファシズム！」  
アツバツツ・イル・ファシズモ

まわりの群衆も同じ叫びを繰り返した。

県知事は卒倒した。カラビニエーレがファシストたちを取り囲んで保護した。歩兵大隊は銃弾を装填せよとの命令を受けた。祝典はだいなしになってしまった。

師団総司令官は平静な状態を回復させようと努力した。彼は非常に人気が高かった。馬に乗って復員兵士たちの中に入って行き、サーベルを抜くと直立の姿勢をとって叫んだ。「国王万歳！」

誰も応えなかった。

自分の声が聞こえなかったと思った將軍はもう一度叫んだ。「国王万歳！」

今度も応える者はいなかった。

それ以上頑張っても無意味だった。將軍は部隊を兵舎に戻した。ファシストたちはカラビニエーレ<sup>24)</sup>に守られて、あたふたと自分たちの本部に戻っていった。復員兵士たちはいくつかの部隊に分かれ、市民の拍手を受けた。群衆はまばらになっていった<sup>25)</sup>。

こうしたサルデーニャの抵抗に対して、ムッソリーニは懐柔と暴力による抑圧という両面の方策をとった。まず、サルデーニャ選出の自由派の下院議員リッシア Pietro Lissia を財務省政務次官に任命し、現地に派遣した。リッシアは11月22日夜に県議会においてムッソリーニ政権擁護の演説を行った。その様子をルッスは次のように描いている。少し長くなるが、彼の文章の特徴をよく示しているので、紹介しよう。

わたしは彼の演説をこれからも忘れることは決してないだろう。今でもその言葉を一語一語正確に再現することができるくらいだ。言葉に添えた身振りもすべて、<sup>レリッ</sup>浮き彫りを目の前にしているように、はっきりと覚えている。

このわたしの同僚議員は愛煙家でいつも手元に葉巻を持っているのを好んだことを前もって言うておく必要がある。上着のポケットにきちんと並べられた葉巻は、まるで軍人の胸につけられた勲章のように見えた。彼は話しているあいだも葉巻が必要だった。ポケットに手を突っ込んだり、掌で時計をいじったり、ボタンを引っ張ったりしないと、うまく自分の考えを表現できない話し手はたくさんいる。彼の場合には葉巻からインスピレーションを得ていた。厳密かつ重要な考えを表現しなくてはいけない場合、彼は必ずポケットから葉巻を引っ張り出した。そしてそれを口に近づけたり、遠ざけたり、くるくる回したりした。それはあたかもフェンシングの選手が剣で敵の顔を狙い、脇腹に一撃を加えようとする動作だった。

親密な関係の中であれば、こうした動作もとりたてて大きな印象はもたらさなかった。わたしと話しているあいだに彼がこの種の身振りをするのを何度も見たし、喫煙者がこんな風に振る舞うのは当たり前のことと思えた。

だが、この夜の県議会ではまったく違った風を感じられた。一列に並んだポケットの葉巻を見て、聴衆は奇妙な感じを受けた。そしてリッシア議員が話し始め、神経質に葉巻を握りしめて振り回し、まるでアクロバットのように複雑な動作を始めると、奇妙な感じはさらに強まった。会議場の中に笑い声が、最初はそっと控え目に忍び込み、やがて騒がしいまでに大きくなった。出席者たちが抑えようとすれば



するほど、その笑い声は当惑するほどの大きさになった。

突然会場が騒がしくなった原因が自分にあることに大臣はすぐ気づいたが、その理由を突き止められなかった。体制のすべての権威筋から威嚇を受けていると感じた彼は、おそろしく強硬な調子で反発した。

「諸君」彼は叫んだ。「民主的カーニバルの季節は終わったのだ。ムッソリーニの政府はわらの政府ではない。法は力である……」

全体として敵対的な聴衆の多い会場での演説であることを、彼は無視してしまった。

演説を論評するざわめきが広がり始めた。

「道化役者め！」<sup>イストリオーネ</sup>傍聴席からボーイソプラノの声が響いた。

大臣は黙ってしまった。聴衆は拍手した。出席者の大半は立ち上がった。今や全員が笑っていた。県知事は笑わなかった。怒りで顔を真っ赤にしなが、カラビニエーレの警備隊を会場に入れて妨害者を逮捕させるように命じた。

大臣はブルブル震え始めた。カラビニエーレの警備隊は不遜な口を挟んだ人物を逮捕することができず、聴衆が騒ぐ中を会場から出て行かなくてはならなかった。

大臣は再び話し始めた。聴衆の目の前で葉巻がくるくる回ったかと思うと、ポケットから手に、手から口へと移動する様子は目が回るほどだった。

「まずは席におつき下さい！」と大臣は叫んだ。

彼はこの命令をファシストの一団に向けた。彼らは大臣の入場のときに立ち上がって、それ以来「気をつけ」の不動の姿勢で立ち続けていた。この軍隊の姿勢を政府の代表が解除してくれるのを待っていたのだ。ファシストたちは体操のようなすばやい動作で座った。

「諸君」リッシア議員はまた話し始めた。「《ローマ進軍》については触れないことにしよう。それはわれわれのためではなく、われわれが作り上げた祖国の偉大さのためである。」

「その点は気にしない、気にしない」とまた別の声が演説をさえぎった。

集会はその厳粛さをかなり失っていた。大臣の権威は揺らいでいた。彼はその時点で冷静さを失い、「ドゥーチェ」の名前を脅迫するように連呼したが、ムッソリーニではなくムソリーノと何度も発音してしまい、言い直そうとしてもできなくなってしまった。ムソリーノとはカラブリアの有名な山賊の名前で、その頃はまだ生きており、殺人と誘拐の罪で終身刑を宣告されていた。

危険な状況に陥りつつあった。大臣は公共事業について話すことで、体面を守ろうとした。

「これまでの諸政府はサルデーニャ島の切実な利害を裏切ってきた。しかし、ムソリーノは過去を修復する意図を持っている。諸君の希望を明らかにして欲しい。諸君が最も緊急に必要とすることを言ってもらえれば、政府はその事業をさっそく始めるだろう。短期間のうちに、官僚機構に由来する遅延なしに、すべての事業が開始されるだろう。」

政府が不可欠と認めた事業を説明し、ファシズムにあえて抵抗し妨害しようとし

た反対派に対する厳しい報復の脅しで演説を終えた。

「われわれは容赦しないだろう。そういう連中は叩きつぶすことになるだろう。」

演説の最後で「ドゥーチェ」とファシズム、祖国、国王をはめちぎった。

その場にいた人々の中で拍手をしたのは県知事、警察署長とファシストだけだった。

大臣は椅子に座り、葉巻もそれとともに落ち着いた<sup>26)</sup>。

この演説のあとにルッスは発言を求め、ファシズムと政府に対する反対の立場を表明した。集会後にカリアリではファシストと反対派の間で衝突が発生し、その混乱の中でルッスは王国警備隊 Guardia regia のメンバーから暴行を受け負傷した<sup>27)</sup>。反ファシスト・グループのリーダーたちが逮捕され、ルッスが負傷、入院したというニュースに数多くの市民が自然発生的に集まり、病院を取り囲む。その翌日はサルデーニャ全島がゼネスト同様の状況となり、ファシストたちは街頭から姿を消してしまった<sup>28)</sup>。反ファシズム運動のリーダーの立場にルッスは否応なく立たされることになった。

イタリアの他の地域の多くと同様に、サルデーニャでも1922年のムッソリーニ政権成立の段階でのファシストは少数派であった。そして、11月から12月にかけてサルデーニャの各地で展開された懲罰遠征と呼ばれる暴力によって反対派を政治的に無力化させる戦術は、憎しみと反発を買うだけで合意をもたらすことはなかった<sup>29)</sup>。その後も警察・政府機構を後ろ盾にしてファシストたちがルッスをはじめとする反ファシストたちへの攻撃を続けるが、それはむしろファシストに対する世論の反発を招いた。その結果ムッソリーニは懐柔と分断による合意の獲得に乗り出す。何よりもサルデーニャの反ファシスト勢力の中で最も強力なグループであるサルデーニャ行動党がその標的となった。

こうして1923年1月にカリアリ県知事に任命され、サルデーニャのファシスト化を推進したのはアスクレピア・ガンドルフォ Asclepia Gandolfo 将軍であった。第一次大戦末期の司令官であり、《ローマ進軍》にも参加してファシストの軍事組織の規程を作った人物でもあるガンドルフォ将軍の起用は、サルデーニャの復員兵士たちをファシズムに取り込むための方策であった。彼はそれまでのファシストたちを切り捨てて、新たなファシスト勢力をサルデーニャに作ろうとした。ルッスはガンドルフォの次のような演説を紹介している。

わたしはすべての反対派に、とりわけ兵士たちに呼びかけたい。諸君が反ファシストであるのは、君たちの土地のファシストたちがならず者だったからである。わたしは彼らの全員を監獄に送り込もう。……わたしは君たちの父親であって敵ではない。わたしは君たちの司令官なのだ。……わたしは今までの県知事と同じではない。政治的自由が脅威にさらされていると君たちは言う！ それならファシズムに加わって、自由を守りたまえ。そうすれば君たちが状況を支配するようになるだろう。わたしは君たちの手にファシズムを委ねよう。君たちは彼らを好きなように扱えばよい。真のファシストは君たちでなくてはならない<sup>30)</sup>。

そして、サルデーニャでは次第にファシストに転向する者が増えていった。ルッスはファ

シストたちに暴力的な攻撃を受けた人々が、ガンドルフォ将軍と手を結んで自らが新たなファシストのリーダーとなり、昨日までのファシストたちを同じやり方で迫害した例を数多くあげている。彼によればそれは自然な反発ということになるが、ファシズムの支配が定着して行くに連れてそこに順応しようとする人々が増えることはある意味では当然のことである。また、復員兵士たちの運動の中にはファシスト的な部分が存在し、逆にファシズムの中にはそうした兵士たちの不満を吸収する部分が存在した。こうしてサルデーニャでは「第二期のファシズム *fascismo della seconda ora*」が始まった<sup>31)</sup>。

1923年から1924年までの二年間、ルッスはサルデーニャとローマでファシズムとの壮絶な後退戦を戦うことになった。まず1923年5月に彼は下院議員の辞表を提出した（が、これは議会から拒否された）。これは「黒シャツを着ていても、権力を握ることでサルデーニャ行動党が島の支配者となり、サルデーニャの政治を純化することができる」と考えるグループが党の主流派となったことが理由だった。彼らはガンドルフォ将軍との妥協を辞さなかった<sup>32)</sup>。ルッスはいったんは故郷のアルムンジアに引きこもったが、隠棲は彼の気性とは無縁のものだった。7月に入って議会でアチェルポ法と呼ばれる新選挙法の審議が始まると、彼は下院に戻った。この法案は、少なくとも25%以上の得票を得た、相対的多数派に議席の三分の二を与えるというもので、議会におけるファシストの力を決定づけるために提出された。この議会でのルッスとムッソリーニのやりとりは次のようなものだった。

ルッス：私は現在辞表を提出しており、この議場にとどまる資格はないと感じている。……しかし、私がこの議会に参加した理由は、下院が失った威信を取り戻そうとしていると考えるからである。……また首相（ムッソリーニ）がその演説の中で、彼及びファシズムがイタリアの復員兵士全員の支持を得ていると繰り返し発言しなければ、私はここで発言を求めなかっただろう。首相閣下、それは事実ではない。

ムッソリーニ：全国復員兵士連盟 *Associazione dei combattenti* の議事録にそう記載されている。（拍手喝采）

ルッス：ファシズムに支持を与えるべきではないと考えている、イタリアが本当の意味で自由を取り戻すまでファシズムに支持を与えようとは思わない、そうした無数の復員兵士を代表して私は発言する。その数をあげても仕方がないが、首相に対して自由を要求する復員兵士たち（ローマには多くないかもしれないが）をこの私は記憶の中にとどめているということである。（右翼席から激しい野次）

アチェルポ（総理府次官）：40万人の中にたった一人とは！（右翼席から強い賛同の声）

ルッス：もしお答えいただけるようなら、次のような質問をしたい。すなわち、ファシズムに賛同しない復員兵士たちは結社の自由を持ちうるのか、という質問である。

ムッソリーニ：可能である。

ルッス：この答弁を覚えておこう。しかし、未来の話ではなく過去の事実から判断すれば、首相の発言を記録にとどめるだけにしておこう。そして、現在のところ私は法案に反対票を投じることにする。（右翼席から激しい野次）<sup>33)</sup>

新選挙法は結局可決され、それにもとづいて翌1924年4月6日に選挙が行われた。選挙運動期間中は反対派に対してファシストと政府警察機構が一体となった猛烈な選挙妨害が続いた。選挙の結果は、ファシスト政権側の候補者リストがイタリア全体では実に64.9%を獲得して下院の450議席中374議席を得た（そのうち275人は全国ファシスト党 Partito Nazionale Fascista の党員）<sup>34)</sup>。ルッスも選挙期間中何回か妨害を受けたが、再選を果たした。議会の新しい会期が始まって一週間後の6月7日に彼は下院での演説を行った。彼の直後にムッソリーニの演説が予定されていたため議場は満員だった。ルッスはファシストたちの専横ぶりを徹底的に批判して次のような言葉で演説を終えた。

君たちが権力の座にあることで祖国に奉仕していると信じているように、我々は反政府の立場にとどまることで祖国に仕えていると確信している。我々は自分たちの道を晴れやかに歩み続けるだろう。少数の特権者のためのイタリアではなく、すべての者のイタリアのために。それは何世紀にもわたる殉教者たちの犠牲によって得られたものなのだ。我々の魂の向かうところ、それは自由なるイタリアなのだ！（左翼席からの拍手喝采、野次多し）<sup>35)</sup>

6月10日のマッテオッティ失踪から始まるいわゆる「マッテオッティ事件」後の危機的状況下では、ルッスは議会内の反ファシスト勢力を結集した《アヴェンティーノ連合》加わるが、その無力な対応にたびたび反発を示した。しかし、最後まで彼は《アヴェンティーノ連合》にとどまった。国王の介入を期待して無為に時を過ごしたアヴェンティーノ派に対して、ファシスト側は1925年1月3日のムッソリーニの下院での演説をきっかけに攻勢に転じた。これ以後ファシズム体制は急速にその力を強めていく。

1926年10月31日ムッソリーニはボローニャでいくつかの集会に出席し、夕方にその街頭で狙撃された。弾丸は彼の上着をかすめ、怪我はなかった。犯人として16歳の少年がその場でリンチにあって刺し殺されたが、この事件の正確な事情は現在でもはっきりしていない。しかし、問題はこの事件のニュースが伝わった直後のファシスト側の反応だった。激高したファシストたちによってナポリではベネデット・クローチェの家が襲撃され、ジェノヴァでは社会党の機関紙『イル・ラヴォーロ』の発行所が焼き討ちにあった。そして、ルッスの身にも大きな事件が起きる。

ルッスはカリアリの家にいた。町の中心部にあって貴族の所有する大きな建物の二階の5部屋が彼の家だった。ムッソリーニ暗殺未遂のニュースは発生後3時間ほどでカリアリにも届いた。夜の9時を過ぎていた「報復のためにすべてのファシストに緊急の集合命令が出されている。君の命が危ない」と友人たちから知らされたルッスは、しかし逃げずに自分の家に立てこもった。

わたしの家の前の広場は町のご真ん中にあっただが、人っ子ひとりいなかった。家も商店も扉を閉ざしていた。遠くからファシストの歌声がやかましく聞こえてきた。わたしはがらんとした家の中でたったひとりだった。わたしは防御の準備を始

めた。猟銃が一丁、軍用ピストルが二丁に弾薬の備えは十分だった。戦利品である二本のオーストリア軍の鉄矛を壁にたてかけた。ふたりの若い友人が階段を駆け上ってきて、ファシストの一隊が向かってきており、わたしをリンチにすると叫んでいることを興奮しながら伝えてくれた。逃げるつもりがないことを告げると、彼らはわたしを守ることを申し出た。わたしは彼らにその場を離れるように強く求めなければならなかった。彼らを送り出して通りに入る扉を閉めたとたん、近づいてくる一団からわたしの名前が威嚇を込めて発せられるのが聞こえた。

「くたばれルッス！ アツバツツ・ルッス ア・モルテ ルッスに死を！」

……時間さえあれば多くの知人を襲撃者たちの中に見つけられただろう。しかし通りに面した大扉は打ち破られ、二階のわたしの部屋まで続く階段は叫び声をあげる男たちでいっぱいになった。ドアがすぐに破られるものとしてわたしは防御の準備をしていた。

ところがドアは壊れなかった。中で銃を構えて待ちかまえていると知らせてやったので、ファシストたちは最初の努力のあと、大げさに熱意を示す必要はないと考え始めた。

そこで広場を占拠していた部隊は三つに分かれた。ひとつはわたしの家に続く階段に入り込んだ者たちを支援する。もうひとつは広場に面した五つの窓によじ登る。最後のひとつは建物の背後にまわって中庭からの侵入を試みる、という具合だった。

このような戦術を予想していなかったわたしは、たったひとりですべて同時に三方から襲ってくる敵をどうやって防いでよいのか困ってしまった。最初の攻撃に対処するには、ある場所から別の場所へと素早く移動しなければならなかった。白状するが、わたしは生涯の中でこれほど苦しい状況にあったことはない。広場の喧噪はすさまじいものだった。窓を襲撃している者たちを広場の連中が嵐のような大声で激励していた。

バルコニーにひとりごと着いた。目の前に姿を現した最初の男に向かってわたしは発砲した。不運な男は下に落ちていった。

恐怖が群衆にとりついた。あっという間に広場から人影が消えてしまった。アパートの階段からは物音ひとつ聞こえなくなった<sup>36)</sup>。

にらみ合いの状態が続き、ファシストに代わって警官とカラビニエーレたちがルッスの家を取り囲んだ。そして警察署長が直接戸口に現れた。

ドアにノックの音がした。

「あけて下さい、ルッス代議士！」

それは警察署長の声だった。

「わたしの名誉と子どもたちにかけて、あなたを守るためにここに来ていると誓います。」

彼の部下たちも声を合わせて証言した。

「その通りです。われわれ全員があなたを守るためにここにいます……」

わたしは、警察署長の言葉を信じられないほど自分が不愉快な状況にいることをドア越しに説明した。

「もしあなたが入りたければ、お入りなさい。しかし灯りは消してピストルで狙っていると警告しておきます。あなたひとりで、両手を挙げたまま入って下さい。」

「そんなことはできない！ イタリア王国の警察署長ともあろう者が手を挙げたまま入っては行けない。」彼はため息をついた。

「それでは、警視正をひとりよこしなさい。」

そしてかつての同僚で声をよく知っているある警視正の名前を伝えた。

「それはいい考えだ」警察署長は言った。「警視正君、きみが行くんだ。」

取り決めにしたがって、警視正が両手を挙げて入ってきた。

広場には少なくとも千人のカラビニエーレがいた。

一時間後、警察署長も中に入れた。

多少困惑しながら彼はわたしに逮捕の通告を行った。わたしは刑法典を開いて正当防衛に関する部分を読み上げた。だが警察署長はなさねばならない辛い義務があることを説明した。つまり私を逮捕するという義務だった。

刑法が役に立たないことがわかると、わたしは憲法に訴えた。わたしは下院議員だった。会期中の議会のメンバーを保護するための免責特権は憲法で認められていた。この論拠も役に立たなかった。

わたしは手錠をかけられ、カラビニエーレの大部隊に護送されて監獄に入れられた<sup>37)</sup>。

#### 4 流刑囚・脱獄者

ルッスは逮捕された。ルッスが撃ったのはたった一発だったが、バルコニーから侵入しようとしていた22歳のファシストに命中し、バルコニーから落ちたファシストは死んだ。多くの目撃者の前で展開された事件であって事実経過ははっきりしており、これを法的に処理するには本来ならばさほど時間がかからないはずであった。ところが、1926年10月31日の事件当夜に逮捕された彼が、監獄を出たのは1927年11月17日のことであり、実に13カ月にも及ぶ獄中生活を送ったのである。しかも、監獄を出た彼を待っていたのは自由な生活ではなく流刑囚としての生活だった。

長い未決期間があった。ルッスに対する予審 *istruttoria* が5カ月にわたって行われ、「意図的殺人罪 *omicidio volontario*」として告発された。ルッスの裁判にはファシスト政府の強力な圧力が加えられた。まず、予審で正当防衛を理由として無罪、釈放の判決が下ると、法務大臣の圧力下で上級審である重罪裁判所 *Corte d' Appello* は判決を破棄して差し戻した。そして、裁判地をカリアリから中部イタリアのキエーティ *Chieti* へと変更することを法務大臣は働きかけた。キエーティには名うてのファシスト司法官たちが集められており、マッテオッティ事件の被告たちはここで裁かれて名目だけの微罪で釈放されていた。しかし、カリアリの司法官たちはこれに抵抗し、結局裁判はサルデーニャ島で続けられた<sup>38)</sup>。

ルッスの裁判の決着がついたのは1927年10月22日のことだった。三人の予審判事は彼の殺

人行為を「夜間、自宅に入り込もうとした者たちを排除するために、やむなく行ったもの」と判断して無罪、釈放という判決を再び下したのである。ここでファシズム体制はルッスの釈放を阻止するために新たな逮捕命令を出した。そして、「公共の秩序を守るため、国家的利害を考慮して」反ファシストの指導者たちの行動の自由を制限する例外的規定が適用された。これは司法による措置ではなく、行政的措置であって、警察署長が招集する委員会で決定が下されるものだった。その結果流刑地での5年間の強制指定居住 *domicilio coatto di confino* という決定が下された<sup>39)</sup>。

流刑地はシチリアの北にあるリーパリ島 Lipari であった。しかし、ルッスは獄中生活の間に呼吸器官の病気にかかっていた。この病気はその後10年以上も彼を苦しめることになる。

わたしの症状では即座に移送するわけにはいかなかった。熱が下がるのを待たねばならなかった。監獄の担当医師は規則にしたがって、わたしが移送不能であると断言した。それでも政府は依然としてわたしを出発させるように命令した。

カリアリの町は非常に動揺していた。監獄の周辺には正規軍の特別部隊が配備された。わたしの脱獄を恐れていたのだ。わたしの独房には夜の間ひっきりなしに看守がやってきた。そして県知事はわたしが収容されていることを確かめる電話を何度もかけてきた。

警察署長はわたしが監獄から出発する場に立ち会うことを望んだ。

彼は微笑みながら静かに言った。「リーパリ島ではとても有名なヴェルナッチャ（サルデーニャ産のアルコール度の高い辛口の白ブドウ酒）がとれますよ。」そしてわたしに手を差し伸べた。わたしは酒を飲まないと言った。彼に答えて、そうした挨拶は無用だとも伝えた。政治犯の心理は囚われの身の王子の心理だ。

母に別れを告げる時間も与えられなかった。わたしは急いで港まで護送されたが、その途中で見たものは配置された正規軍部隊と自転車に乗った武装パトロール隊だけだった。

埠頭には人影はなかった。定期便の運行は中止されていた。いたるところに歩哨とパトロールがいた。警察のボートに乗ろうとしたとき、漁師の帆船が一隻、風に乗って速いスピードで港に入ってきた。船はわたしの目の前数メートルのところを横切った。ひとりの若い水夫がわたしの顔を見分けて、何が起きているのかを理解した。彼はひとつ飛びで船首に移動し、まっすぐに立って叫んだ。

「ルッス万歳！ サルデーニャ万歳！」

これがわたしの島との最後の別れだった。

波止場のパトロールたちが着岸する船に向かって殺到した。あの漁師が武装した男たちに取り囲まれて姿を消すのがちらっと見えた<sup>40)</sup>。

リーパリ島は周囲34キロメートルの小さな島で、当時の人口はおよそ9千人、そのうち4千人がコムーネの役場のあるリーパリの町に居住していた。この島に当時収容されていた流刑囚は約500人で、彼らはリーパリの町の1キロ四方に満たない領域から外に出ることを許されず、その彼らを約400名の監視要員が見張っていた<sup>41)</sup>。流刑囚たちは全員が反政府運動

を理由としてここに送られてきた人々で、ルッス以外にも8人の下院議員経験者が含まれていた。

ルッスはリーパリ島へ1927年11月19日に到着したが、その様子をひとりの流刑囚が次のように回想している。

監視兵やファシスト義勇兵たちがいたために近づけなかったが、彼の到着は見逃さなかった。ルッスは背の高い瘦せた男で、明るい茶色のレインコートに身を包んで幽霊のように見えた。手錠をかけられて目のところまで深くベレー帽をかぶり、降りかかる雨を防いでいた。大勢の警官や制服姿の連中で一杯の広場を決然とした早足で歩いて、囚人の引き渡しが行われる司令部に向かった。手錠も大勢の警官を引き連れていることも気にせず、素速く歩いていた。二人のカラビニエーレが彼のトランクを持っていた<sup>42)</sup>。

流刑囚たちは昼間は決められた範囲の中では自由に動くことができた。また、既婚者は家族を呼び寄せて一緒に住むことも許されていた。しかし、政治に関して議論することが禁止されることや手紙が検閲されることなど、その行動にはさまざまな制限が課せられていた。そして、貧しい流刑囚たちは政府が支給する一日10リラという金額で、食料・宿泊・衣服その他すべてをまかなわなければならなかった。島で仕事を見つめることができたのは、特殊な技能を持つごくわずかな流刑囚たちだけで、ほとんどの流刑囚は無為の生活を強いられた。また、流刑囚の間には体制側から送り込まれたスパイがいて、その密告にもとづいて「陰謀」が摘発されては多くの逮捕者が出ていた<sup>43)</sup>。ルッスはリーパリ島に到着した直後から逃走を考え始めた。

それまでリーパリ島から脱走に成功した流刑囚は一人もいなかった。ルッスの逃亡計画に加わって脱獄クラブ Club della fuga を結成したのは、まずフィレンツェでサルヴェーミニ Gaetano Salvemini と共に反ファシスト運動を組織して社会党の創立者であるトゥラーティ Filippo Turati を1926年12月に国外に脱出させ、この事件のために10カ月の禁固刑のあと5年間の流刑処分を受けてリーパリ島にやってきたカルロ・ロッセッリ Carlo Rosselli がいた<sup>44)</sup>。その他に元首相フランチェスコ・サヴェリオ・ニッティ Francesco Saverio Nitti の甥で共和派に属する反ファシスト活動家ファウスト・ニッティ Fausto Nitti もいた。

ロッセッリが加わったことが逃走計画の決め手になった。何よりもまず彼の妻マリオン Marion がイギリス人で、イギリスのパスポートを持っていたために自由に国外に出て反ファシスト勢力との連絡が取れたことがあげられる。そして、ロッセッリが財産家であったことも計画の実現にはプラスに働いた。計画は非常に単純だった。監視の目を盗んで海に向かって泳ぎ出し、あらかじめ近くまで来ていた船に救出してもらおう、というものだった。しかし、この計画も予定通り船が来なかったり、別の逃亡計画が発覚して急に警備が厳しくなったりして中止になったり、結局成功したのは五回目の1929年7月27日のことだった<sup>45)</sup>。外出禁止時間の午後9時を過ぎた頃だった。三人は海に入り泳ぎ始めた。

海はべた凧だった。突然かすかなエンジンの音が聞こえてきた。一隻のモーター



ボートが近づいてきた。合図は打ち合わせ通りだった。カイオ——リーパリ島に流刑されていて刑期満了で釈放されていたジョアッキーノ・ドルチ *Gioacchino Dolci* のことで、ここでは偽名が使われている——が船首にいるのが見えた。この出会いでは言葉はひとつも交わされなかった。一人、また一人と我々は船に乗り込んだ。船首が素速く回って狭い海峡をめざした。そして、そこを抜けると広い海に向かい、長い航跡を残して進み始めた<sup>46)</sup>。

ルッスたちは14時間の航海ののちにフランスの領海に逃れた。彼らはまずチュニスに到着し、次いでマルセイユを経由して8月1日にはパリに着いた。パリのリヨン駅ではトゥラーティ、サルヴェーミニ、トレーヴェス *Claudio Treves*、モディリアーニ *Giuseppe Emanuele Modigliani* らが出迎えた<sup>47)</sup>。

## 5 国外における反ファシズム運動——《正義と自由 *Giustizia e Libertà*》

既に1927年4月にはイタリア国外に亡命した反ファシスト活動家たちによってパリで《反ファシスト連合 *Concentrazione antifascista*》が結成されていた。ここにはトレーヴェス、トゥラーティらの改良派及びネンニ *Pietro Nenni* らの最大限綱領派という二つの社会主義勢力の他に、共和党、労働総同盟などの旧左翼勢力が集まっていた。《アヴェンティーン連合》の主力でもあったこれらの旧勢力の、ファシズム体制の自壊を期待する待機主義的姿勢に対して、ルッスたちはきわめて批判的な立場を貫いた。そこから生まれてきたのが、党派 *partito* ではなくて革命的運動 *movimento rivoluzionario* をめざした《正義と自由 *Giustizia e Libertà*》であった。

ルッス自身が「亡命後最初の数年間我々は陰謀・蜂起・革命以外のことはまったく考えなかった」と述べているように<sup>48)</sup>、《正義と自由》の初期の運動は行動を重視する点に大きな特徴があった。ルッスたちの脱走それ自体もまさにその一つであったが、大胆な行動を通じて独裁体制下にあるイタリアの実状を国際世論に告発することを彼らはめざした。ルッスはパリに着いてすぐに脱走までの経緯を描いた『鎖 *La catena*』という著作を発表し、これは当時40万人といわれた在仏イタリア人移民の間で広く読まれた。1929年10月24日にネンニと親しい21歳の学生デ・ローザ *Fernando De Rosa* がブリュッセルでイタリア皇太子ウンベルトを狙撃する事件が起きると、《正義と自由》に集まる人々は熱狂的にこれを支持して裁判での支援活動を展開した<sup>49)</sup>。また、ドルチとバッサネージ *Giovanni Bassanesi* という二人の《正義と自由》の活動家は、1930年7月11日にスイスから飛び立った飛行機でミラノのドゥオーモ広場にファシズムへの反乱を呼びかける宣伝ビラを撒くという派手な事件を引き起こした。フランスの警察に逮捕されたバッサネージの裁判では、ロッセリらが証言に立ってファシズム体制を弾劾した。

しかし、こうした《正義と自由》の活動に対してファシズム体制側はスパイを送り込み、この組織とつながるイタリア国内の活動家たちを1930年10月に一斉に検挙した。逮捕された者のほとんどが、それ以前からロッセリやルッスたちの反ファシズム運動と関係を持っていた知識人たちであった。サルヴェーミニが中心となって展開された、国家防衛特別裁判所

でのファシストによる裁判を批判する動きはヨーロッパの多くの知識人たちの賛同を集めた。翌年春には活動家たちに対する裁判が始まるが、多くは予審も行われずに釈放された。しかし、単独でムッソリーニの暗殺を計画して逮捕されたサルデーニャ出身のアナキストであるスキル Michele Schirru は銃殺刑に処せられ、その他《正義と自由》の主たる国内メンバーに対しては20年以上の懲役刑という過酷な刑が宣告された。この裁判に抗議して《正義と自由》はボローニャ、トリノ、ジェノヴァで爆弾闘争を展開するが、これも結局は新たな逮捕につながった。

この一連の逮捕によって《正義と自由》はそれまでの行動主義的戦略を転換し、反ファシズム陣営内での立場を修正することを余儀なくされた。まず、1931年7月には社会党との「行動統一協定」を結び、さらに同じ年の秋には「反ファシズム連合」にも加わった。これはルッス、ロッセッリらが「連合」の執行委員会のメンバーとなったことから推測されるように、ある意味では《正義と自由》の影響力が反ファシズム運動全体に拡大したことの反映でもあった。しかし、「反ファシズム連合」内部およびその周辺では、さまざまなグループの間で基本的な路線をめぐる対立が絶えず続いていた。

要するに、過激な革命的路線を主張する《正義と自由》派に対して、より穏健な路線にこだわる共和党、コミンテルンの強い影響下において「反ファシズム連合」の外にとどまり続けた共産党、その共産党との人民戦線路線を追求する社会党（結局社共両党の合意は1934年8月17日に成立する）など、文字通りの同床異夢の状態が1934年5月の連合の解散まで続いた。もちろん、ここにいたるまでにはドイツにおけるナチス政権の成立などさまざまなファクターが働いているのはいうまでもないが、ルッスが1934年2月に《正義と自由》の機関誌『ノート Quaderni della Giustizia e Libertà』に寄せた一文も影響している。「方向性について Orientamenti」と題されたこの文章でルッスは「反ファシズム運動の社会主義的性格を強化するだけでなく、《正義と自由》によってイタリアの社会主義運動を統一する」ことを提起した。それは、ムッソリーニやヒトラー、ドルフスらに対するヨーロッパの社会主義（イタリアの社会主義・ドイツの社会民主主義）の敗北を分析した上で展開されている。イタリアでの経過について彼は次のように書いている。「40年にも及ぶプロレタリアの組織化の成果を打ち倒すのに、わずかの期間に集められた少数の金目当ての悪党連中 pochi briganti mercenari だけで十分だった。革命的軍隊であったはずの組織を解体するには機関銃の一斉射撃どころか牛乳配達人の馬車の音だけで十分だった<sup>50)</sup>。」こうした表現は社会党の人々の反発を招き、衝突の原因ともなった。

ルッスは共産主義と民主的社会主義の違いを強調し、後者こそ《正義と自由》がめざすものとした。「共産主義者たちは、理論的には一時的なものであるが実質的には永続的な、テロルによって社会主義を実現できると考えている。我々はそうは考えていない。テロルやあらゆる形態の独裁に対してそれが持続的な建設能力を持つことを否定する。いかなるケースにおいても、テロルが文明の建設的要因であるとは認めがたい<sup>51)</sup>。」共産党を含む既製の左翼勢力に対するルッスの厳しい評価は、当然のことながら、1930年代半ばから第二次世界大戦の開始にいたる時期に反ファシズムの立場をとる亡命者たちの中である種の孤立状態をもたらすことになった。また、肺疾患の影響もあり、この時期ルッスは苦しい政治活動を続けた。

その後のルッスの活動については紙幅の関係もあり、簡単に触れておくだけにとどめよう。フランスでの亡命生活は第二次大戦の開始まで続き、開戦後はレジスタンス運動に積極的にかかわった。マルセイユ、リスボンでの難民の脱出工作や、レジスタンスへの支援をめぐって連合軍側とロンドン、ワシントンで交渉を行った<sup>52)</sup>。1943年8月にはイタリアに戻り、行動党 Partito d'Azione の指導部に参加して国内でのレジスタンス活動を続けた。そして、戦後は1945年のパッリ内閣と翌年の第一次デ・ガスペリ内閣で大臣を務め、1946年の選挙ではやはりサルデーニャから下院議員に当選している。1947年の行動党の解散後は社会党に合流し、上院議員として活動する。しかし、ここでも生来の革命的気質から1964年の党内左派の分裂＝統一プロレタリア社会党 Partito Socialista di Unità Proletaria の結成に加わった。1968年まで上院議員をつとめた。1975年3月5日85歳のルッスはローマで死去するが、自宅は借家で慎ましい生活ぶりだった<sup>53)</sup>。

### おわりに——著述家としてのルッス

ルッスの著作の中でも最もよく知られている『ローマ進軍とその周辺 *Marcia su Roma e dintorni*』は亡命直後の1931年に執筆され、1933年にパリのクリティカ出版 Edizioni Critica から刊行された。これは1919年から1929年の流刑地脱出までのルッス自身の体験を核として、ファシズムの実像を外国の読者のために描こうとしたものであった。したがってこれはファシズム現象全体への目配りのきいた著述ではなく、ルッス自身認めているように「私とその誕生・成長・成功を見たファシズムの記録<sup>54)</sup>」であり「イタリアの文明の一時期に関するたんなる主観的記録<sup>55)</sup>」なのである。しかし、ファシズムに関する凡百の歴史書よりもこの本が力を持ちうるのは、観察者であり記録者であるルッスの文章が並外れて力強いためである。それは物語を口承で語り伝えたサルデーニャの伝統を引き継いだもののように思える。彼の文章は平易で明解でありながら、広い意味空間を内包している。《正義と自由》の同志であり、その後もルッスと行動を共にするガロッシ Aldo Garosci は『ローマ進軍とその周辺』を評して次のように書いている。

ルッスは政治家そして英雄としての資質を備えている上に、詩的才能に恵まれた文筆家でもある。時に応じて皮肉や悪意、憂愁に満ちた文章が微妙かつ平易なスタイルで展開されていながら、民衆的である<sup>ボボラーレ</sup>ことを忘れていない。賭けてもよいが、政治的亡命を行った著述家の中で最も多くの読者を得るのはルッスだろう。我が国のリソルジメント時代の作家たちとの近親性を感じさせる唯一の著述家が彼である<sup>56)</sup>。

また「周辺」というところにこの本の特徴があるだろう。つまり、サルデーニャというイタリアの中の「周縁部」でのファシズムの勃興の過程をひとりの人間の目から見ている。それはローマや半島部の大都市での現象だけでは捉えきれない歴史過程を浮かび上がらせている。そして「周辺」には、これにはルッスという人物の個性が反映しているのだが、都市と農村の生活者という視点も含まれている。さまざまな場面で登場する無名の庶民たちが生き

生きと描かれている。

ルッスはカリアリの監獄に収監されていた間に呼吸器官の病気にかかるが、それが流刑と亡命生活の間にさらに悪化した。そして、1934年4月から1937年5月までの長い療養生活を余儀なくされた。この期間の彼は政治活動から遠ざかるが、執筆活動を続けた。その成果がもうひとつの代表作『高原の一年』となって表れる<sup>57)</sup>。序文の中でルッスは、この本が彼の戦争体験を本にせよというサルヴェーミニの働きかけがあって書かれた、と述べている。実際にこれは1916年5月から翌年7月までの戦場の記録である。

第一次世界大戦を描いた文学作品としては、バルビュス Henri Barbusse の『炎 *Le feu*』やレマルク Erich Maria Remarque の『西部戦線異状なし *Westen nichts Neues*』、ヘミングウェイ Ernest Hemingway の『武器よさらば *A Farewell to Arms*』などがよく知られている。ルッスのこの著作は小説ではないが、第一次大戦の実状を現在に伝えている重要な作品といえるだろう。しかも、文学作品としても高い価値を持っている。

戦争はルッスが参戦運動を通じて掲げていたような理想や情熱とは無縁のもので、ひとつの自動的なメカニズムとして兵士たちの生命を消費していく。下級将校としてルッスが置かれていた立場は、愛国主義の旗の下に戦勝の栄光を追い求める司令部と自分たちの生命を何としても守ろうとする大半の兵士たちの間で、両者の関係を何とか保とうとするものであった。しかし、この本の中で語られているように、開戦時の熱狂はやがて幻滅に、幻滅はやがて現状の告発へと変わっていく。『高原の一年』はこうしたルッスの精神の変化の過程を見事に描き出している。

ルッスの著作の魅力は、ひとつひとつのエピソードをくっきりと浮かび上がらせることができる表現力とともに、それを通じて感じられるルッス自身の人間性にもあるだろう。それは謙虚かつ無欲であると同時に、ひとつの使命感に貫かれた人間像である。それだけではない。全体を通じてユーモアに溢れ、悪意を自在に表現する作家の視線といったものを読者は見いだすことになる。ルッスがイタリア現代史の伝説的な人物となった根拠は、その著作からも十分に理解できるのである。

## 註

- 1) G. Candeloro, *Storia d'Italia moderna*, vol. 1., Milano, Feltrinelli, 1956, pp.97-98.
- 2) *Sommario di statistiche storiche dell'Italia* (1861-1975), Roma, ISTAT, 1976.
- 3) E. Lussu, *Il cinghiale del diavolo e altri scritti sulla Sardegna*, a cura di Simonetta Salvestroni, Torino, Einaudi, 1976 (1<sup>a</sup>: 1968), p.11.

この『悪魔の猪 *Il cinghiale del diavolo*』は、彼の子供時代に関する最良の資料であると同時に、幼年期を回想した文学作品としてもサルデーニャの山地住民の価値観や神話を紹介する作品としても非常に優れている。

- 4) *Ibid.*, p146.
- 5) *Ibid.* pp.61-62.
- 6) *Ibid.*, pp.62-64.
- 7) *Ibid.*, p.9.
- 8) G. Fiori, *Il cavaliere dei Rossomori. Vita di Emilio Lussu*, Torino, Einaudi, 1985, pp.20-22.

- 9) E. Lussu, *Ricordo di Gaetano Salvemini*, in *Salvemini*, Boston, 1958.
- 10) G. Sotgiu, *Storia della Sardegna dalla Grande Guerra al fascismo*, Bari, Laterza, 1990, p.11.
- 11) G. Ungaretti, *Tutte le opere*, Milano, Mondadori, 1988, p.520.  
井手正隆『イタリアの二人の詩人』あざみ書房, 1994年, 11頁からの再引用
- 12) E. Lussu, *Un anno sul Altipiano*, Paris, 1938, (Torino, Einaudi, 1981, p.13)
- 13) *Ibid.*, pp48-49.
- 14) E. Bellieni, *Emilio Lussu*, Cagliari, 1924, pp.39-43. (in Fiori, p.46.)
- 15) G. Tommasi, *Brigata Sassari. Note di guerra*, Roma, 1925. (in Fiori, p.58.)
- 16) Fiori, p.73.
- 17) P. Melograni, *Storia politica della Grande Guerra, 1915-1918*, Bari, Laterza, 1969, p.238.  
この戦死者以外に、捕虜となって死亡した者、戦闘中の行方不明者(死者)、「スペイン風邪」による死者などを加えて、第一次大戦による広義の死者の数を120万人と見る説もある。  
Candeloro, *Storia dell'Italia moderna, vol. VIII. La prima guerra mondiale, il dopoguerra, l'avvento del fascismo*, Milano, Feltrinelli, 1978, pp.222-223.
- 18) Sotgiu, p.10.
- 19) *Ibid.*, pp.18-19.
- 20) E. Lussu, La Brigata Sassari e il Partito Sardo d'Azione, 《*Il Ponte*》, VII, 1951, pp.1078-79.
- 21) Sotgiu, pp.105-110.
- 22) 戦前からトリノの鉄道員組合の書記をしていたミシアーノは徴兵されてすぐに脱走し、裁判中にスイスに逃亡した。終戦時にはベルリンに滞在していた。裁判は継続していたが、1919年の選挙で下院議員に当選したことにより行動の自由を回復していた。  
E. Lussu, *Marcia su Roma e dintorni*, Paris, 1933. (ここでは Torino, Einaudi, 1976, pp.23-25.)
- 23) *Ibid.*, pp.31-38.  
Sotgiu, p.121-123.
- 24) カラビニエーレ Carabiniere とは内務省に直属する警察・治安維持を担当する軍隊編成の部隊のことで、「憲兵」と訳される場合もあるが、これは明らかに誤りである。
- 25) E. Lussu, *Marcia su Roma e dintorni*, cit., pp.62-63.
- 26) *Ibid.*, pp.69-71.
- 27) *Ibid.* pp.77-79.  
王国警備隊とは1919年にニッティ内閣の下で創設された国家防衛を目的とする部隊である。主として大都市の治安の維持・混乱の予防などにあたった。1922年のファシズム政権の成立直後に解体された。
- 28) Fiori, pp.126-127.  
Sotgiu, pp.198-199.
- 29) *Ibid.*, p.200.  
一例を挙げれば、12月3日の朝、島の北東の端にあるテッラノーヴァ Terranova ——ここはイタリア半島からの連絡船がつく港町である——に対してファシストたちが行った懲罰遠征事件がある。このときの主力は本土のチヴィタヴェッキアのファシストたちであって、地元のファシストはあくまでも助力しただけであった。  
Lussu, *Marcia su Roma e dintorni*, pp.107-113.
- 30) *Ibid.*, p.136.
- 31) *Ibid.*, pp.137-139.

- 32) Sotgiu, pp.227-228.
- 33) *Atti parlamentari*, XXVI Legislatura, 15 luglio 1923, p.10680.
- 34) G. Candeloro, *Storia d'Italia modrna. vol. 9. Il fascismo e le guerre*, Milano, Feltrinelli, 1981, p.64.
- 35) *Atti parlamentare*, XXVII Legislatura, 7 giugno, 1924, p.236.
- 36) Lussu, *Marcia su Roma e dintorni*, cit., pp.170-172.
- 37) *Ibid.*, pp.173-174.
- 38) *Ibid.*, pp.177-178.  
E. Lussu, *La catena*, Paris, 1929, ora in *Per l'Italia dall'esilio*, Cagliari, Edizioni Della Torre, 1976, pp.69-70.  
Fiori, pp.179-181.
- 39) *Ibid.*, p.182.  
Lussu, *La catena*, cit., p.71.
- 40) Lussu, *Marcia su Roma e dintorni*, cit., pp.178-179.
- 41) Fiori, pp.185-186.
- 42) P. Palladini, *Cento metri di catene*, Cartografital Penne, 1977. (in Fiori, pp.190-191.)
- 43) Lussu, *La catena*, cit., pp.80-85.
- 44) 流刑にいたるまでのロッセッリについては  
Nicola Tranfaglia, *Carlo Rosselli dall'interventismo alla Giustizia e Libertà*, Bari, Laterza, 1968.
- 45) Lussu, *La catena*, cit., pp.89-91.
- 46) *Ibid.*, p.92.
- 47) *Ibid.*, p.39.
- 48) *Ibid.*, p.39.
- 49) Fiori, pp.225-226.
- 50) Lussu, *Per l'Italia dall'esilio*, cit., p.13.
- 51) Id., *Riflessioni sulla crisi e sulla rivoluzione*. (in Fiori, p.268.)
- 52) Id., *Diplomazia clandestina*, Firenze, La Nuova Italia, 1956. (ora in *Alba rossa*, Transeuropa, 1991.)
- 53) Fiori, p.383.
- 54) 1933年版の序文  
Lussu, *Marcia su Roma e dintorni*, cit., p.7.
- 55) 1944年版の序文  
*Ibid.*, p.9.
- 56) *Quaderni di Giustizia e Libertà*, 9 novembre 1933.
- 57) この本の出版の経過については,  
Giorgio Amendola, *Intervista sull'antifascismo*, Bari, Laterza, 1976.  
邦訳: ジョルジョ・アメンドラ『反ファシズム抵抗運動』(山崎 功・諏訪幹子訳) 合同出版, 1983年, 119-120頁